

# ドイツ語の数詞について

—「21」のような端数のある数を中心に—

黒 沢 宏 和

## 0. 序

「数詞」の読み方に関しては各言語においてその特異性が見受けられるが、ドイツ語も決して例外とは言えない。ドイツ語の場合、それは差し詰め「21」のような端数のある数であろう。筆者は以前学生から、なぜドイツ語では21を„einundzwanzig“「1と20」というように日本語・英語式の発想からすれば全く逆に読むのか、という質問を受け、返答に窮した経験がある。

このような「なぜ」という学問の根底にある問いに答えることは、一方では一語学教師としての重要な責務であり、このことを通じて、その学生がドイツ語に興味を持つということも期待される。

他方、一研究者の立場からすれば、この問題はドイツ語を外国語として学ぶ者であるからこそ思いつく興味深いテーマのように思われる。なぜなら、数詞に関してもかなり詳しく記述している文法書でさえ、このような端数のある数に関してはほとんど触れられていないからである<sup>1</sup>。つまり、その数詞が変化するか否か、変化するとすれば、どういう変化をするのか、という形態論に関することに記述の中心が置かれ、この問題についてはほとんど考慮されていないからである。

そこで本稿では、通時的・共時的見地からこの問題を考えてみたい。

## 1. サンスクリット・ギリシャ語・ラテン語

先ず最初に、サンスクリット及び古典語から考察の歩を進める。サンスクリットでは、11, 12, 13をそれぞれ次のように表す。

ekādaśa(n)- (ekā- 1・daśa(n)- 10)

dvādaśa- (dvā- 2・daśa- 10)

trayod° (trayo- 3・d° 10)

2(dvi-), 3(tri-)及び8(aṣṭa(n)-)は, 10, 20, 30の前ではそれぞれdvā-, trayas-, aṣṭā-となり, 80の前では dvi-, tri-, aṣṭa-となる。40から70, 及び90の前ではいずれの形を用いてもよい。例えば, trayon°/trin° 93 (n°=navati- 90)。

また, d°=daśa(n)- 10, n°=navati- 90のように十の桁を略す言い方は, 10から90にまで適用される。

21, 22, 23は次のように表す。

ekaviṁśati-(eka- 1・viṁśati- 20)

dvāv°(dvā- 2・v° 20)

trayov°(trayo- 3・v° 20)

つまり, サンスクリットでは現代ドイツ語の dreizehn, vierzehn..., 現代英語の thirteen, fourteen...のような「一の桁・十の桁」という表現が, 99にまで及んでいる。

また, ekonaviṁśati- (eko- <eka- 1・na 引く・viṁśati- 20:20-1=19) というように引き算を用いることもあり, この表現法は29, 39等にも用いられる。さらに27を表すのに tryūnatrimśat- (30-3=27) ということもできる。

100から200, 200から300等の中間数を表すのに通常 adhika-「プラス」を用いる。例えば, 101:ekādhikāṁ śatam/ekādhikaśatam (1+100)。

いずれにせよ, サンスクリットにおける数の表現方法は相当に自由である<sup>2</sup>。

ギリシャ語では<sup>3</sup>, 21を表すのに, 次の3種類の方法がある。

1. εἴς καὶ εἴκοσι (ν) (1+20)

2. εἴκοσι καὶ εἴς (20+1)

3. εἴκοσιν εἴς (20・1)

ラテン語では, 21を ūnus et vīginti (1+20) あるいは vīginti ūnus (20・

1) と表現する。ただし、100以上の数では、次のように「大きい数+小さい数」の順序で、et はあったりなかったりする。

tria milia (et) trecenti (et) triginta trēs militēs=3333 Soldaten<sup>4</sup>。

また、18の duo-dē-viginti, 19の ūn-dē-viginti はそれぞれ20(viginti)から(dē) 2 (duo),または1 (ūn-)を引くという意味である。なおvi-ginti (20) は  $(2 \times 10)$ , tri-gintā (30) は  $(3 \times 10)$  のことである<sup>5</sup>。

以上の考察から、ギリシャ語・ラテン語といういわゆる古典語の時代に既に、現代ドイツ語式の数え方が存在していたことが分かる。言い換えれば、この数え方が特に珍しいという訳ではなく<sup>6</sup>、ドイツ語は既存のこの数え方を受け継いでいるに過ぎないのである。

そこで今後は、このことを手掛かりとして、他のゲルマン系・スラブ系の諸言語も可能な限り視野に入れ、前述の疑問に対するより具体的な解答を模索したい。その際、さまざまな数え方が併存する中で、1) ドイツ語ではおよそいつの時代からこの数え方が主流となったのか、2) なぜ und を挿入するのか、という問題に焦点を絞って考察を進めることにする。

なお、11と12は現代英語をも含めてゲルマン系諸言語に共通の数詞であり(ゴート語 ainlif, twalif, 古高ドイツ語 einlif, zwelif), もともと「1余り, 2余り」というふうに、10まで数えてその余りを表現するものである(浜崎 1987年 106ページ)。また、サンスクリットのところで既に言及したが、現代英語の thirteen, fourteen..., 現代ドイツ語の dreizehn, vierzehn...などの13から19までの数も、and や und を用いてはいないものの、一の桁を十の桁より先に読んでいる。もっとも、ギリシャ語ではここでも以下のように καί (und) を用いて表現する。

τρεῖςκαίδέκα(13), έννεακαίδέκα(19)

## 2. 古ゲルマン語

まず、ゴート語から考察を始めたい。ゴート語聖書では数詞の記録例が比較的少なく、しかもたいていは次のように文字が数詞の機能も兼ねている<sup>7</sup>。

a b g d e q z h þ i k l m n j u  
 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 20 30 40 50 60 70

p (q) r s t w f x h v o (个)  
 80 90 100 200 300 400 500 600 700 800 900

\*ただし、90と900を表す文字は、専ら数詞としてのみ用いられる。

従って、端数のある数がどう数えられたか、その実状を知るのは困難と思われる。ただし、以下のように jah(und) を用いている場合もある(強調は筆者による。以下すべて同様)。

jere ahtautehund jah fidwor (Luk. 2, 37) 84歳

niuntehund jah niun (Luk. 15, 4) 99

niuntehund jah \*h\* (Neh. 7, 21) 98

上例の如く、80+4というように現代ドイツ語式の読み方からすれば、逆の方法を採っている場合がほとんどであるが、以下のような例も見られる。

\*e\* jah \*k\* daga (Neh. 6, 15) 25日 (5+20)

従って、ゴート語では、少なくとも現代ドイツ語式と類似した数え方は存在していた、と言えよう。

次に、古ザクセン語の場合である。古ザクセン語でも21以上の数詞の記録例は極めて少なく、筆者が『ヘーリアント』及び『創世紀』(共に830年頃成立)において確認できたのは、*fior endi antahtoda uuintro* (Hel. 513f.) <84年間>のわずか1例である。

ホルトハウゼンは<sup>8)</sup>、21等の合成語の数字は新高ドイツ語と同じようにして形成されるとし、この箇所他に次の2例を挙げている。

*fieri endi thrîtich hōnero* „34 Hühner“

*ahte ende ahtedeg mudde* „88 Mütte“

また、ガレーの文法書にも同様の記述があるので<sup>9)</sup>、古ザクセン語でも現代ドイツ語式の数え方は存在していたと考えてよいであろう。

さて、次に古高ドイツ語の場合である。ブラウネ／エガースによれば<sup>10</sup>、端数のある数は„und“を用いて形成され、大きい方の数は先行しても、後行しても構わないという。さらに両氏は、古高ドイツ語では引き算や掛け算も時折現れることを指摘している。

そこで、これらのことを検証するために、「オットフリート」(870年頃成立)及び「タツィアーン」(830年頃成立)から引用する。

先ず、「オットフリート」からの引用である。

1. *fiarzug inti séhsu* (II. 11,38) 46
2. *wangta zuēin ... thero jaro fiarzug* (III. 4,17) 38年
3. *ēinlif stunt on sibini* (I. 3,36) 77
4. *thria stunton finfzug ... ouh thri* (V. 13,19f.) 153
5. *n̄tun h̄unt z̄ito, séhszug* (II. 4,3f.) 960時間

1. では40+6という言い方をしている (inti は und に相当する)。

2. では38を40－2と引き算で表現している。ケレによれば<sup>11</sup> „wangta“ („wenken“の過去形)はここでは非人称的な用法で、与格の事物と共に用いられ、「～が欠けている、不足している」という意味であるという。この箇所では、„zuēin“ (2) が „zwêne“の中性与格形になっている (Braune/Eggers 1987, S. 231)。なお、この箇所のラテン語は次のように30+8と表現している。

*triginta et octo annos* (Joh. 5,5) 38年 (Kelle 1963, S. 671)

3. は掛け算を用いている。このテキストでは „stunt on“ と表記されているが、ケレの辞書には „stuntôn“ という形で „stunta“ の項にこの箇所が記載されているので、 „stunt on“ = „stuntôn“ と考えてよいであろう。同氏によれば、 „stuntôn“ は „stunta“ の複数与格形であり、本来は „Stunde“ の意であるが、数詞と共に用いられると転義的に「掛ける」 „mal“ を意味するという。従って、 $11 \times 7 = 77$  となる (Ibid., S. 562f.)。

4. は3. の表現をさらに複雑にした言い方である。ouh はここでは und と考えて良いであろう。従って、 $3 \times 50 + 3 = 153$  となる。ラテン語では、*centum quinquaginta tres* (Joh. 21,11) (Ibid., S. 563) と「100・50・3」の如く表現されている。つまり、ラテン語は日本語・現代英語式の言

い方をしているのに対し、「オットフリート」では、より複雑な表現になっている。

5. は本稿で考察の対象とする端数のある数とは言い難いが、念のため言及しておく。「オットフリート」では960時間と表現されているが、ラテン語では以下のように40日間と表現されている。つまり、「オットフリート」では1日を24時間として言い換えているのである (Ibid., S. 287).

*quadráginta diebus et quadráginta noctibus* (Mat. 4,2)

40日間昼も夜も

さて、次は「タツィアーン」からの引用である。参考のため、当該のラテン語も併記する。

6. *unzan fioru inti ahtuzug iaro* (7,9)

*usque ad annos octuáginta quattuor* (Luk. 2,37) 84歳まで

7. *andere zuene inti sibunzug* (67,1)

*alios·LXXII·*(Luk. 10,1) ほかの72人

8. *thie zuene inti sibunzug* (67,3)

*septuáginta duo* (Luk. 10,17) 72人

9. *drizog inti ahto iar* (88,2)

*triginta octo annos* (Joh. 5,5) 38年間

10. *niun inti niunzog* (96,2)

*nonaginta novem* (Mat. 18,12) 99

11. *niuni inti niunzug rehte* (96,6)

*nonaginta novem iustos* (Luk. 15,7) 99人の義人

12. *zehenzug inti finfzug inti thrín* (237,3)

*centum quinquáginta tribus*<sup>12</sup>(Joh. 21,11) 153

6., 7., 8., 10. 及び11. では現代ドイツ語式の数え方になっている。これに対し9. では30+8というように、逆となっている。12. では153を「100+50+3」と表現している。現代語では„hundertdreißig“というが, „zehenzug“ (hundert) の後にも „inti“ (und) を挿入している点が興味深い。

ここで、「オットフリート」と「タツィアーン」に共通する数を基に、両者の表現方法を比較しておきたい。

2. *wangta zuēin ... thero jaro fiarzug* (Otf. III. 4,17)

9. *drizog inti ahto iar* (Tat. 88,2) 38年

38という数を表すのに、「オットフリート」では引き算 ( $40-2$ ), 「タツィアーン」では足し算 ( $30+8$ ) を用いている。

4. *thria stunton finfzug ... ouh thri* (Otf. V. 13,19f.)

12. *zehenzug inti finfzug inti thrin* (Tat. 237,3) 153

153を表すのに、前者は $3 \times 50 + 3$ 、後者は $100 + 50 + 3$ という言い方をしている。既に述べたように、ラテン語では「 $100 \cdot 50 \cdot 3$ 」と日本語・現代英語式の方法を採っている。この当時は、現在に比べ大きな数字を表現する必要が少なかったことは想像に難くないが、「掛ける」„stunt“や「足す」„inti“をその都度付け加えている点が興味深い。この点に関しては後述する。

以上の考察から、次のことが言えよう。「タツィアーン」ではもう既に現代ドイツ語式の数え方が定着しつつあるように思われる。他方、同時代を代表するもう一つの作品である「オットフリート」には、掛け算、引き算、迂言的表現(40日間を960時間と表現)等、さまざまな表現法が散見される。

従って、古高ドイツ語の時代にはギリシャ語やラテン語等において見られたさまざまな数え方がまだ根強く受け継がれ、しかもそれらが併存しており、現代ドイツ語式の数え方もまだそのうちの一つに過ぎなかったのである。

### 3. 中高ドイツ語

さて、次に中高ドイツ語の数詞を考察する。まずは、「ニーベルンゲンの歌」(1200年頃成立)からの引用である。

1. *zwein und drizec fürsten* (266) 32人の王侯

2. *sehs unt ahzec türne* (404) 86の塔
3. *sehs unt ahzec wip* (525) 86名の婦人
4. mit *vier unt zweinzec* recken (542) 24人の武士を伴って
5. *vier unt zweinzec* bouge (558) 24個の腕輪
6. *sehs unt ahzec vrouwen* (572) 86名の婦人
7. *fünfzec unde viere* (573) 54 (人)
8. *zwô und drîzec* meide (700) 32名の侍女
9. mit *drin und vierzec* meiden (833) 43人の乙女と共に
10. *zwên' unt drîzec* man (877) 32名の武士
11. *vier unt zweinzec* ruore (941) 24匹の獵犬
12. in *vier unt zweinzec* tagen (1159) 24日の後に
13. *vier und zweinzec* fürsten (1342) 24人の侯伯
14. *vier und zweinzec* recken (1409) 24人の武士
15. *sehs unt drîzec* magede (1664) 36人の乙女
16. in *zwein und zweinzec* stürmen (1796) 22回の戦いで

「ニーベルンゲン」では、随所に端数を用いた箇所が散見されるが、7.を除きその他はすべて現代ドイツ語式である。続いて「クードルーン」(1240年頃成立)からの引用である。

1. *vier und sehzie* meiden (36) 64人の侍女たち
2. tage *vier und zweinzic* (108) 24日の間
3. *vier und zweinzic* recken (183) 24人の騎士
4. mit sterke *sehs und zweinzic* mannen (254) 26人力
5. ze *sehs und drîzie* tagen (286) 36日の間
6. *vier und zweinzic* man (305) 24人の若者たち
7. *zwô und sehzie* vrouwen (801) 62名の侍女たち
8. *zwêne und zweinzic* kocken (1072) 22艘の高舷船
9. in *sehs und zweinzic* tagen (1081) 26日後に
10. *vier und zweinzic* kocken (1121) 24艘の高舷船
11. *sehs und zweinzic* mîle (1135) 26マイル
12. *drî und sehzie* (1300) 63 (人)



13. *sehs und zweinzic manne kraft* (1469) 26人力
14. *mit dri und drizic meiden* (1507) 33人の侍女
15. *zwêne und sehicz degene* (1540) 62人の騎士
16. *sehs und zweinzic bürge* (1547) 26の城
17. *mit vier und zweinzic vrouwen* (1656) 24人の侍女たちと共に

「クードルーン」では、筆者が調べた限りすべて現代ドイツ語式が採られている。先の「ニーベルンゲン」においてもほぼ同様のことが言えるので、中高ドイツ語の時代には、この数え方がほぼ定着したと言えるのではないだろうか。

しかしながら、例えばバウルによれば<sup>13</sup>、1の位と10の位を結ぶ *und* が時折欠けることがあったり、宮廷文学では見られないが、特にバイエルン方言では引き算も見受けられるという。またマウサーによれば<sup>14</sup>、古高ドイツ語と同様、中高ドイツ語においても掛け算が用いられるという。

記述の通り、厳密な年代を特定することが本稿の主眼ではないので、次章でこれ以降の文献を検証した上で判断したい。

なお、中低ドイツ語(Mittelniederdeutsch)においても、一般に「21」は *ēnundetwintich* (*unde*=*und*)と表される。また、融合して *ēnuntwintich* となったり、*unde* がさらに弱化して *ēnentwintich* となることもある<sup>15</sup>。

#### 4. 後期中高ドイツ語から初期新高ドイツ語まで

この章では、フォルツが編集した『後期中高ドイツ語から初期新高ドイツ語へ』から引用する。この本は、さまざまな時代や方言地域から選出された同種の初期新高ドイツ語のテキストを比較・分析するために編まれたものである。この目的を遂げるために、14世紀から16世紀までの間に書かれた六つの聖書(旧約「ダニエル書」)<sup>16</sup>が選ばれ、それらはほぼすべての主要な高地ドイツ語の方言地域を網羅している。なお、それぞれの聖書の成立年代及び方言地域は以下の通りである。

C=約1350年, 東中部ドイツ語    M=1466年, 低地アレマン方言  
 W=1527年, 西中部ドイツ語    Z=1529年, 高地アレマン方言  
 L=1530年, 東中部ドイツ語    E=1537年, シュヴァーベン方言

1. (Dan. 5,31)

C *zwey vnd sechzic* iar aldirts  
W *zweyvndsechzig* jaren alt  
L *zwey vnd sechzig* iar alt  
M•*lxij*•iar  
Z *zwey vnd sechzig* jaren alt  
E *zwai vnd sechzig* jar 62歳

2. (Dan. 9,25)

C *zwu vnd sechzic* wochen  
W *lxij.* wuchen  
L *zwey vnd sechzig* wochen  
M•*lxij*•wochen  
Z *zwo vnd sechzig* wuchen  
E *zwo vnd sibitzig* wochen 62週

3. (Dan. 10,4)

C an deme *viervnzwenzisten* tage des ersten manden  
W am *vier vnd zweyntzigsten* tag des ersten monats  
L im *vier vnd zwenzigsten* tage des ersten monden  
M an dem •*xxiiij*• tage des ersten monedes  
Z am *vier vnd zwentzigsten* tag des ersten monats  
E am *vier vnd zwaintzigsten* tag des ersten monat

1月24日に

4. (Dan. 10,13)

C *einvnzwenzic* tage  
W *eynvndzweyntzig* tag  
L *ein vnd zwenzig* tage  
M•*xxj*• tage  
Z *ein vnd zwentzig* tag  
E *ains vnd zwaintzig* tag 21日間

5. (Dan. 12,12)

C tusunt drihundirt vnd vumfe vnd driseg tage

W tausent dreihundert vnd fünffvnddreissig tag

L tausent/dreihundert vnd funff vnd dreissig tage

M tausenten drey hundertent •xxxv• tagen

Z tusend drühundert vnd fünff vnnd dryssig tag

E tausent tag/dreihundert vnd fünf vnd zwaintzig 1335日

3. は序数の例であるが、基数と同様の数え方がされている。

M版では、ローマ数字が使用されているので、実際にどう読まれたかは判断できないが、その他の版では綴りこそ現代語とは違うものの、ほぼこの時代までには現代ドイツ語式の読み方が定着していた、と言えよう。

なお、5. E版では、最後の„zwaintzig“は明らかに30の誤りであろう。

さて、ここで本稿の一つ目の課題である「およそいつの時代からドイツ語では1と20式の数え方が定着したのか」という問題を考えてみたい。

中高ドイツ語における数詞を考察した際、この数え方がほぼこの時代に定着したと断定するのを一時保留した。しかしながら、C版の成立は約1350年であり、この時期は一般に中高ドイツ語から初期新高ドイツ語への過渡期と考えられる<sup>17</sup>。しかもC版はドイツ騎士団の公用語である東中部ドイツ語(Ostmitteldeutsch)で書かれ、ルター聖書成立以前では最高のものに数えられている (Volz 1963, S. X.)。

以上を考慮すれば、この数え方は少なくとも中高ドイツ語の時代が終わる14世紀中葉までには、定着していたと言えるのではなかろうか。

5. *und* の挿入

さて、ここで本稿の二つ目の課題である *und* の挿入について考えてみたい。

サンسكريットでは、102を *dviśatam* (*dvi*=2, *śata*=100) という時は200と混同を起こすが、*adhika*-(*und*)の使用によってこの混乱を避けることができる。古くはアクセントによって両者を区別していた。つ

まり, *dvīṣatam*=102, *dvīṣatām*=200 (辻 1974年 83ページ).

シチェメレニー (Szemerényi) は古英語の70 (*hundseofontig*) について、以下のように述べている (強調は筆者による)。

「仮に *\*sefontahund* が, *\*sefonta-hund* として解釈されると, *\*sefonta* それ自体70を表すには十分であるので, *\*sefonta hund* は70ではなく, „70 hundreds“ (筆者注:  $70 \times 100 = 7000$ ) と理解される恐れがある。他方, *hund* がその表現の最初に置かれれば, このような誤解は起こり得ないであろう。というのは, 以下のように表されるのが基準となるであろうから。つまり, *hund and seofontig*=„170“,あるいは *hund and seofon and hundseofontig*=„177“. かくして, *hund-seofonta* (あるいは *-tig*) は „170“ とは理解され得ないだろう。」<sup>18</sup>

このように, „und“ (*adhika*-あるいは *and* 等) を用いることによって掛け算ではないことを明示する方法は, 先に引用した例からも明らかである。例えば古高ドイツ語では, 153を表現するのに, 「オットフリート」では *thria stuntun finfzug ... ouh thri* (Otf. V. 13,19f.) ( $3 \times 50 + 3$ ), 「タツィアーン」では *zehenzug inti finfzug inti thrin* (Tat. 237,3) ( $100 + 50 + 3$ ) と表現している。これに対し, ラテン語は簡潔に *centum quin-quaginta tres* (Joh. 21,11) ( $100 \cdot 50 \cdot 3$ ) と表現している。

また, 後期中高ドイツ語以降の例でも, 以下のように1335 (日) を表すのに, M版は例外としても, その他の版ではすべて, 今日の我々の感覚からすると不必要と思われる箇所にまで *und* を挿入している (下線は筆者による)。

- C *tusunt drihundirt vnd vumfe vnd driseg* tage
- W *tausent dreihundert vnd fünffvnddreissig* tag
- L *tausent/dreihundert vnd funff vnd dreissig* tage
- M *tausenten drey hundertent·xxxv·tagen*
- Z *tusend drühundert vnd fünff vnnd dryssig* tag
- E *tausent tag/dreihundert vnd fünf vnd zwaintzig*

(Dan. 12,12)

上例をよく見ると, L版とE版は1000と300との間に斜線 (Virgel) を挿入していることに気付く。勿論, ここでも朗読の際の息つぎの段落と

も考えられるが、まだこの時代には他の版のように続けて書いてしまうと、掛け算と誤解される恐れがあるので、敢えて区切ったのではなかろうか。また、現代語では *tausenddreihundertfünfunddreißig* のように続けて書くのが普通であるが、逆に続けて書くということで誤解を防いでいるようにも思われる。この問題は正書法とも大いに関係するので、稿を改めて考えたい。

以上の考察から、und を挿入することにより、掛け算と明白に区別される、ということが理解できよう。

## 6. 英語

英語史では、次のような時代区分をするのが普通である<sup>19</sup>。

古英語 (Old English)	約700～1100年
中英語 (Middle English)	約1100～1500年
初期近代英語 (Early Modern English)	約1500～1700年
近代英語 (Modern English)	約1700年以降

古英語時代の代表的作品である「ベオウルフ」(8世紀頃成立)における数詞を調べてみたところ、「21」のような数は1例も確認できなかった。しかしながら、1から19までの数については *fyftyne* 15 (1582f.), *twelfa* 12 (3165) のように、現在とほぼ同じ表現をしているものの他に、.xii., .xv. などのように、ローマ数字を用いて表現している例が4例ある<sup>20</sup>。

一般に、古英語では現代ドイツ語と同様、「1位 and 10位」(*ān ond twēntig*) という語順である<sup>21</sup>。

中英語では、チョーサー (G. Chaucer) の「カンタベリー物語」(1387～1400年) から引用する。

1. *nyne and twenty* (S. 8) 29 (人)
2. *fyve and twenty yeer* (S. 62) 25歳
3. *degrees was fyve and forty clombe on highte* (S. 125)  
45度の高さに昇って
4. *thritty dayes and two* (S. 270) 32日
5. *twenty degrees and oon* (S. 270) 21度

6. *fourty degrees and oon* (S. 270) 41度
7. *ladies foure and twenty* (S. 332) 24人の貴婦人
8. *to foure and twenty mo* (S. 343) 24人以上もの所へ
9. *four and twenty grotes* (S. 361) 24グロート
10. *in foure and twenty houres* (S. 442) 24時間の間
11. *the eighte and twenty mansiouns* (S. 470) 28の館
12. *degreës nyne and twenty* (S. 537) 29度
13. *nynety and nyne rightful men* (S. 583) 99人の正しい人

13例中9例 (1., 2., 3., 7., 8., 9., 10., 11., 12.), つまり約7割が *one and twenty* タイプの表現をしている。一方、残りの3割は *twenty and one* タイプなので、この時代には古英語以来の *one and twenty* という古いタイプの勢力が依然として強いものの、新しい *twenty and one* タイプが現れ、その二つが併存していた、と言えよう。なお、中尾によれば、*twenty-one* というタイプの語順は、中英語末まで現れない、という<sup>22</sup>。

初期近代英語の例として、先ず初めにシェイクスピア (1564～1616) を取りあげたい。

フランツは『シェイクスピアの英語』の中で、以下のように述べている。「二種の上述の数え方 (筆者注: *one and twenty/twenty-one*) のほかになお一つ、1611年の聖書に知られている十位と一位との結合法がシェイクスピアにあらわれる: *sixty and nine* (Troil. Prol. 5 VI.3), しかしそれはまれな例外である。」<sup>23</sup>

フランツのこの記述が正しいとすれば、チョーサーの時代に台頭してきた *twenty and one* タイプはわずか150年を経たシェイクスピアの時代にはほぼ消滅することになる。

そこで、彼の全作品を網羅した『シェイクスピアの完全なるコンコーダンス』<sup>24</sup>に基づき調査したところ、以下のような結果が得られた<sup>25</sup>。

A	<i>one and twenty</i> タイプ	35例 (70%)
B	<i>twenty and one</i> タイプ	2例 (4%)

C twenty-one タイプ

13例 (26%)

計 50例

この数値から、フランツの記述は正しいことが分かる。チョーサーの時代に現れ始めたBタイプは、シェイクスピアの時代になると、その座を完全にCタイプに奪われている。

先のフランツの記述中の「1611年の聖書」というのは、ジェームズ I 世の命によって翻訳された『欽定英訳聖書』(*The Holy Bible Of The Authorized Version*) を指しているものと思われる。シェイクスピアの作品には韻文も多く含まれているので、彼とほぼ同時代の散文の資料を考察するという意味で、以下にこの欽定訳の新約の四福音書(ただし「マルコ伝」には該当例なし) 及び旧約の「ダニエル書」の中から当該の数詞を引用する。

1. the *ninetie and nine* (Mat. 18,13) 99 (匹)
2. *fourescore and foure yeeres* (Luk. 2,37) 84歳
3. the *ninety and nine* (Luk. 15,4) 99 (匹)
4. *ninety and nine* iust persons (Luk. 15,7) 99人の義人
5. *fourty and six yeres* (Joh. 2,20) 46年
6. *thirtie and eight yeeres* (Joh. 5,5) 38年間
7. *five and twentie* (Joh. 6,19) 25
8. *an hundred and fiftie and three* (Joh. 21,11) 153
9. *threescore and two yeere old* (Dan. 5,31) 62歳
10. *threescore and two weekes* (Dan. 9,25) 62週
11. in the *foure and twentieth* day of the first moneth (Dan. 10,4)  
1月24日に
12. *one and twentie*. dayes (Dan. 10,13) 21日間
13. the *thousand, three hundred and five and thirtie* dayes  
(Dan. 12,12) 1335日

2., 9., 10では score (×20) を用いて、20進法で表現している。これ

らの表現は現代フランス語の quatre-vingts 80 [4(×)20], quatre-vingt-dix 90 [4(×)20(+)10] 等を想起させる。

意外にも7., 11., 12., 13.を除き, 他は全てBタイプである。これらの資料からだけでは断定できないが, 少なくとも欽定訳聖書の中ではシェイクスピアでは例外的な存在であったBタイプは比較的頻繁に現れ, むしろ現代英語式のCタイプの方が例外である, と言えよう。

また, 先に考察した古高ドイツ語の「タツィアーン」や中高ドイツ語の「ニーベルンゲンの歌」においても, このBタイプは極めてまれであった事実と考え合わせれば, Bタイプは欽定訳聖書においては例外的に頻繁に現れる, と言えるのではなからうか。

散文である聖書と韻文を多く含んだ文学作品とでは, そもそも数詞の表記方法も異なっており当然なのかもしれない。しかし, これらのほぼ同年代の資料は, 依然として古英語以来のAタイプが根強く存続し, かつ他の2タイプも併存している, ということを示している。ドイツ語では既に中高ドイツ語の終り(14世紀中葉)には古典語以来の表現方法が定着したのに対し, 英語では初期近代英語の時代に入ってもなお3タイプが併存している。両者の相違は4章で考察した後期中高ドイツ語以降の例と本章の例とを比べてみれば, その差は一目瞭然である。大塚によれば<sup>26</sup>, Aタイプは18世紀頃まで使われていたという。

そこで, 大塚のこの指摘を検証すべく, 18世紀へと時代を下りたい。

先ず, アディソン (J. Addison) とスティール (R. Steele) の共同発行による日刊紙『スペクテーター』(1711~12, 1714年)には, 以下のようなAタイプが見られる。

*four and twenty* Letters (S.176) 24通の手紙

*five and thirty* Years (S. 241) 35歳

フィールドイング (H. Fielding) の『トム・ジョーンズ』(1749年)では, 以下のように1. (Bタイプ), 11. (Aタイプ)を除き, 他は全てCタイプが用いられている。

1. the sage dame of *forty-and-five* (S. 10) 45歳の賢婦人

2. *thirty-five* years of age (S. 23) 35歳



3. *twenty-four* hours (S. 40) 24時間
4. *twenty-four* hours (S. 212) 24時間
5. the age of *twenty-five* (S. 310) 25歳
6. the age of *twenty-one* (S. 310) 21歳
7. *twenty-four* hours (S. 352) 24時間
8. *twenty-four* hours (S. 481) 24時間
9. *twenty-four* hours (S. 481) 24時間
10. *twenty-four* hours (S. 568) 24時間
11. *six-and-twenty* (S. 597) 26

さらに時代を下り、ボズウェル (J. Boswell) の『サムエル・ジョンソンの生涯』(1791年)からは、以下のような結果が得られた<sup>27</sup>。

A	one and twenty タイプ	8 例 (21.1%)
B	twenty and one タイプ	0 例 (0%)
C	twenty-one タイプ	30 例 (78.9%)
		計 38 例

上述の通り、大塚は one and twenty タイプは「18世紀頃まで」使用されていた、と述べている。しかし、これらの数値からさらに限定を加え、このAタイプは少なくとも「18世紀末まで」は存続していた、と特徴づけできるのではなかろうか。

かくして、これらの考察を進めれば、次のことが言えようか。即ち、古英語(約700~1100年)の時代には one and twenty タイプが用いられていた。中英語(約1100~1500年)の時代になると twenty and one タイプが現れ始め、さらに中英語末には twenty-one タイプが現れる。この3タイプは以来約3世紀に亘って併存し続け、漸く18世紀末に twenty-one タイプが定着する。

古英語から中英語へと移行する英語史の流れの中で、英語は「古英語の総合的 (synthetic) 言語から中英語の分析的 (analytic) 言語へと大きく変化した」(中尾 1979年 10ページ)はずであるが、殊に数詞に関し

ては初期近代英語になってもまだその変化の黎明期であった。

## 7. ゲルマン系・スラヴ系諸言語

さて、ここで共時的観点からゲルマン系及びスラヴ系諸言語における数詞を概観しておきたい。先ず、ドイツ語、英語以外のゲルマン系諸言語における数詞から考察を始める。

- オランダ語 : één en twintig (en=und)  
デンマーク語 : en og tyve (og=und)  
スウェーデン語 : tjugoen (共性), tjugett (中性) (tjugo=20)  
ノルウェー語 : enogtyve (en=1, og=und, tyve=20)  
tjueen (tjue=20, en=1)  
アイスランド語 : tuttugu og\* einn (og=und)  
古アイスランド語 : tuttugu og einn, einn og tuttugu

\* og は ok となることもある。

オランダ語及びデンマーク語では、現代ドイツ語式の言い方である。ただしデンマーク語では、50から90までの数は20進法によって以下のように表される<sup>28</sup>。

halvtreds	50 (halvtredsindstyve の略)	$2\frac{1}{2} \times 20$
tres	60 (tresindstyve の略)	$3 \times 20$
halvfjerds	70 (halvfjerdsindstyve の略)	$3\frac{1}{2} \times 20$
firs	80 (firsindstyve の略)	$4 \times 20$
halvfems	90 (halvfemsindstyve の略)	$4\frac{1}{2} \times 20$

$\frac{1}{2}$  は en halv,  $1\frac{1}{2}$  は halvanden (anden=zweit) と表現する。つまり、 $1\frac{1}{2}$  は「二つ目の半分」、 $2\frac{1}{2}$  は「三つ目の半分」(tred < tredie=dritt) の如く表される。なお、50から90までの語に現れる sind は「掛ける」を意味する。従って、51は en og halvtreds の如く表される。

スウェーデン語では、性によって語形に違いがあるものの、und に当たる och を用いず、現代英語の twenty-one のような言い方をする。

ノルウェー語では、1951年に tjueen 21 ( $20 \cdot 1$ ), tjueto 22, tjuetre 23 のような現代英語式の言い方が導入され、現在はこの新タイプと旧タイ

プの enogtyve 21(1+20), toogtyve 22, treogtyve 23 のような現代ドイツ語式とが併存している。しかし、依然として旧タイプの方を好む人々が多勢である<sup>29</sup>。

古アイスランド語（約800年～15世紀）では、「加算的」及び「減算的」な言い方があったが、現代語では一般に「加算的」な言い方しかなく、以下のように最後の数の前に og (und) が入る<sup>30</sup>。

hundrað og þrír 103; eitt þúsund og tuttugu 1020

現代ドイツ語では103を hundertdrei のように、und を用いずに表現するが、アイスランド語ではここにも og を挿入している点が興味深い。

以上のことから、ゲルマン系の言語においては einundzwanzig タイプの言い方が極めて多く、ノルウェー語のような併存型も存在するが、twenty-one タイプは少ない、と言える。

さて、次にスラヴ系の言語を考察する。東スラヴ語からロシア語、ウクライナ語を、西スラヴ語からチェコ語、ポーランド語を、南スラヴ語からブルガリア語を考察の対象とする。

ロシア語：два́дцать о́дин (男性) (20・1)

два́дцать о́дна (女性)

два́дцать о́дно (中性)

два́дцать о́днѣ (複数形, 性は問わず)

ウクライナ語：два́дцять о́дин (男性) (20・1)

два́дцять о́дна (女性)

два́дцять о́дно/о́дніє (中性)

два́дцять о́дні (複数形, 性は問わず)

チェコ語：dvacet jeden (男性) (20・1)

dvacet jedna (女性)

dvacet jedno (中性)

ポーランド語：dwadzieścia jeden (男性) (20・1)

dwadzieścia jedna (女性)

dwadzieścia jedno (中性)

ブルガリア語：два́десет и едѝн (男性) (и=und, 20+1)  
 два́десет и еднá (女性)  
 два́десет и еднó (中性)  
 два́десет и еднѝ (複数形, 性は問わず)

ロシア語の1及び2には性がある。1には上記のように四つの形があり、2にはдва (男・中性), две (女性) の二つの形がある。3以上には性による区別はない。

数詞と格との関係は、1の後では単数主格、2、3及び4の後では単数生格、5以上の数詞の後では複数生格となる。「21」のような数では、以下のように最後の数詞の要求に従う<sup>31</sup>。

два́дцать одѝн дом 21軒の家 (男性)  
 два́дцать однá кнѝга 21冊の本 (女性)  
 два́дцать однó письмó 21通の手紙 (中性)

\* 名詞は単数主格形。

два́дцать два до́ма 22軒の家  
 два́дцать две кнѝги 22冊の本  
 два́дцать два письма́ 22通の手紙

\* 名詞は単数生格形。

два́дцать пять домо́в 25軒の家  
 два́дцать пять кнѝг 25冊の本  
 два́дцать пять пи́сем 25通の手紙

\* 名詞は複数生格形 (ただし、数詞は変化しない)。

特定の数詞や性・格において、さまざまな規則があるものの、「21」のような数詞は現代英語と同様、桁順に並べるだけでよい。

ウクライナ語では、1及び2には性があり、1には上記のように五つの形がある。2にはдва́ (男・中性), дві́ (女性) の二つの形がある。数詞も名詞と同様、その格に応じて変化する<sup>32</sup>。「21」のような数に関しては現代英語式である。

チェコ語では、1及び2には性があり、1には上記のように三つの形があり、2には dva (男性), dvě (女・中性) の二つの形がある。数詞と格との関係は、数詞も格変化するために、1から4までの数詞は、後続の名詞と「数・格」で一致し、性も区別があれば一致する。5から20では、名詞は主格・対格で複数生格に、その他の格では数詞と同じ格に立つ<sup>33</sup>。「21」のような数に関しては現代英語式である。

ポーランド語では、1及び2には性があり、1には上記のように三つの形があり、2には dwa (男・中性), dwie (女性) の二つの形がある。数詞と格との関係は、1の後では単数主格になるが、2・3・4の後では複数主格、5以上の数詞の後では複数生格になる。「21」のような数に関しては現代英語式である<sup>34</sup>。

ブルガリア語では、1と2には性があり、上記のように1には四つの形があり、2には двā (男性), двē (女・中性) の二つの形がある。「21」のような数詞は и (und) を用いて20+1のように表す<sup>35</sup>。

以上の考察から、スラブ系の言語では、ブルガリア語のように「21」を и (und) を用いて20+1と表現したり、また性や格においてさまざまな規則があるものの、殊に「21」に関しては一般的に twenty-one タイプであると言える。

先に考察したゲルマン系言語とスラヴ系言語とを比較すれば、前者には現代ドイツ語式が多く、後者には現代英語式が多い、と言えよう。

## 8. まとめ

さて、ここで本稿の冒頭に挙げた学生からの質問に解答しておきたい。先ず、通時的見地からすれば、以下のことが言えよう。

古高ドイツ語の時代(約750～1050年)には、ギリシャ語、ラテン語等のいわゆる古典語の時代の遺物がほぼそのまま受け継がれた。その結果、「引き算、掛け算」等のさまざまな数え方・表現方法が存在したが、紆余曲折を経て中高ドイツ語の終わり頃(14世紀中葉)になると、現代ドイツ語式の „einzundzwanzig“ [「1と20」という数え方が主流となった。言い換えれば、さまざまな数え方や表現方法の中から、この数え方がギリシャ・ラテン語の時代から現代に至るまで受け継がれているのである。

一方, „und“に関して言えば, 掛け算でないことを明示するという理由から挿入し, それがいつの間にか定着し, 受け継がれたと考えられる。

他方, 英語に関して言えば, 古英語 (約700~1100年) の時代には one and twenty タイプが用いられていた。中英語 (約1100~1500年) の時代になると twenty and one タイプが現れ始め, さらに中英語末には twenty-one タイプが現れる。この3タイプは以来約3世紀に亘って併存し続け, 漸く18世紀末に twenty-one タイプが定着する。つまり, 言語史に即して言えば, 英語で twenty-one という言い方が定着するようになったのは, ごく最近のことなのである。従って, [„einundzwanzig“をなぜ日本語・英語式に読まないのか] という質問中の「英語式」は誤りで, 厳密には「現代英語式」と訂正するべきであろう。

次に, 共時的見地からすれば, 以下のことが言えよう。

ドイツ語を英語やフランス語と比較すれば, 英語式に簡素化・合理化の道 (aengl. ān ond twēntig → engl. twenty-one) も, フランス語式に迂言的な道 (afrz. setante [70], uitante [80], nonante [90] → frz. soixante-dix [60 (+) 10], quatre-vingts [4(×)20], quatre-vingt-dix [4(×)20(+)10])<sup>36</sup>もとらず, 頑に伝統的な読み方を受け継いだという点に, ドイツ語の保守性が見い出せるのではなからうか。

しかし, 他のゲルマン語やスラブ語も視野に入れると, このような特徴づけは適切ではない。上述の通り, 「21」に関しては, ゲルマン語には現代ドイツ語式が多く, スラブ語には現代英語式が多い。このことは, 取りも直さず数詞に関してはゲルマン語の方に古い表現が残っている, ということに他ならない。なぜなら, 英語では3タイプが併存した時期もあったが, one and twenty タイプが最も古く, 次いで twenty and one, そして最後に twenty-one という順序で現れてきたからである。

いずれにせよ, 格の数や語順などに印欧語の伝統を強く残している保守的なスラブ語が, 殊に数詞に関してはそうではなく, ドイツ語, オランダ語, デンマーク語, ノルウェー語, アイスランド語の方に古い形が残っているのは興味深いことである。さらに, ゲルマン語の中で最も革新的な英語においてさえ, twenty-one タイプが現れてから定着するまでに約300年を要したことを想起すれば, 殊に数詞に関しては, 伝統的な

読み方を受け継いだという点に、ドイツ語のみならず、むしろゲルマン語の保守性が見い出せるのではなかろうか。

#### テキスト

- Streitberg, Wilhelm (hrsg.): *Die gotische Bibel*, Heidelberg 1908 ; 6.Aufl. 1971.  
Behaghel, Otto (hrsg.): *Heliand und Genesis*, Tübingen 1882 ; 9.Aufl. 1984.  
Erdmann, Oskar (hrsg.): *Otfrids Evangelienbuch*, Tübingen 1882 ; 6. Aufl. 1973.  
Sievers, Eduard (hrsg.): *Tatian, Lateinisch und altdeutsch mit ausführlichem Glossar*, Paderborn 1966.  
Boor, Helmut de (hrsg.): *Das Nibelungenlied, Nach der Ausgabe von Karl Bartsch*, 21. Aufl. Wiesbaden 1979.  
Symons, Barend (hrsg.): *Kudrun*, Tübingen 1883 ; 4.Aufl. 1964.  
Volz, Hans (hrsg.): *Vom Spätmittelhochdeutschen zum Frühneuhochdeutschen, Synoptischer Text des Propheten Daniel in sechs deutschen Übersetzungen des 14. bis 16. Jahrhunderts*, Tübingen 1963.  
Zupitza, Julius (hrsg.): *Beowulf*, London 1882 ; 2.Aufl. 1959.  
Chaucer, Geoffrey : *The Canterbury Tales*, New York 1929.  
翻刻 研究社・オックスフォード版 欽定英訳聖書 1985年 研究社  
篠田錦策 (編) Addison, Joseph/Steele, Sir Richard : *The Spectator* (Selections), with introduction and notes, 1930年 研究社.  
Fielding, Henry : *The History Of Tom Jones A Foundling*, USA (Random House) 1964.  
Boswell, James : *The Life Of Samuel Johnson*, New York 1931.

なお、邦訳に関しては以下の文献を参照した。

- 佐藤 研／小林 稔 (訳) 『新約聖書 福音書』1996年 岩波書店  
共同訳聖書実行委員会 (訳) 『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』1996年 日本聖書協会  
相良守峯 (訳) 『ニーベルンゲンの歌 (前編) (後編)』1996年 岩波書店  
古賀允洋 (訳) 『王女クードルーン』1996年 講談社  
G. チョーサー 『完訳 カンタベリー物語 (上) (中) (下)』梶井迪夫訳  
1996年 岩波書店

# 注

- 1 Vgl. Behaghel, Otto : *Deutsche Syntax, Eine geschichtliche Darstellung*, Bd. I, Heidelberg 1923, S. 407ff.  
Paul, Hermann : *Deutsche Grammatik*, Bd. II, Tübingen 1968, S. 184ff.  
Krahe, Hans : *Germanische Sprachwissenschaft*, Berlin/New York 1969, S. 87ff.
- 2 辻直四郎『サンスクリット文法』1974年 岩波書店 82～83ページ.
- 3 田中美知太郎／松平千秋『ギリシャ語入門改訂版』1991年 岩波書店 205ページ.
- 4 Throm, Hermann : *Lateinische Grammatik*, Berlin 1995, S. 41.  
B. H. ケネディ『新修ラテン文法』J. マウントフォード改訂 松野道男訳著 1991年 南雲堂 53ページ.
- 5 泉井久之助『ラテン広文典』1952年 白水社 324ページ.
- 6 浜崎長寿『ゲルマン語の話』1987年 大学書林 103～107ページ.
- 7 Braune, Wilhelm/Ebbinghaus, Ernst A. : *Gotische Grammatik*, Tübingen 1880 ; 19. Aufl. 1981, S. 13f. u. 98.
- 8 Holthausen, Ferdinand : *Altsächsisches Elementarbuch*, Heidelberg 1921, S. 138.
- 9 Gallée, Johan Hendrik : *Altsächsische Grammatik*, Tübingen 1993, S. 235.
- 10 Braune, Wilhelm/Eggers, Hans : *Althochdeutsche Grammatik*, Tübingen 1886 ; 14. Aufl. 1987, S. 234.
- 11 Kelle, Johann : *Glossar der Sprache Otfrids*, Neudruck der Ausgabe 1881, Aalen 1963, S. 671.
- 12 Sievers のテキストでは...tribus (奪格) となっており, 既出のケレの Glossar では...tres (主格) となっている.
- 13 Paul, Hermann : *Mittelhochdeutsche Grammatik*, Tübingen 1881 ; 23. Aufl. 1989, S. 237f.
- 14 Mausser, Otto : *Mittelhochdeutsche Grammatik*, III. Teil, München 1933, S. 874.
- 15 藤代幸一 (他)『中世低地ドイツ語』1987年 大学書林 47～48ページ.
- 16 六つの聖書の詳細は, 次の通りである.  
C =Claus Crancs Prophetenübersetzung (ca. 1350)  
W =Ludwig Hätzers und Hans Dencks Wormser Prophetenübersetzung (1527)



L = Martin Luthers Danielübersetzung (1530)

M = Johann Mentelins Straßburger Bibeldruck (1466)

Z = Züricher Prophetenübersetzung (1529)

E = Johann Ecks Bibelübersetzung (1537)

なお、このテキストでは左右見開き 2 ページを使って、六つの聖書を一度に見ることができるよう工夫されている。つまり、左ページには中部ドイツ語 CWL が、右ページには上部ドイツ語 MZE が、それぞれ年代順に配列されている (Volz 1963, S. XX IV)。本稿では著者の意向を尊重し、CWLME という順序で引用する。

- 17 Schmidt, Wilhelm : *Geschichte der deutschen Sprache*, 7. Aufl. Stuttgart/Leipzig 1996, S. 27.
- 18 Szemerényi, Oswald : *Studies in the Indo-European System of Numerals*, Heidelberg 1960, S. 38.
- 19 Görlach, Manfred : *The Linguistic History of English*, Hong Kong 1997, S. 21.
- 20 四つの箇所の詳細は以下の通り (括弧内は行数を示す).  
.xii. (146), .xv. (207), .xii. (1868), .xii. (2401).
- 21 小野 茂／中尾俊夫『英語史 I』(英語学大系 第 8 巻) 大修館書店 1980年 362ページ.
- 22 中尾俊夫 『英語史 II』(英語学大系 第 9 巻) 大修館書店 1979年 239ページ.
- 23 ヴィルヘルム・フランツ『シェークスピアの英語一詩と散文一』斎藤 静(他) 訳 1982年 篠崎書林 335ページ.
- 24 Bartlett, John : *A Complete Concordance of Shakespeare*, London 1953.
- 25 それぞれのタイプの詳細は以下の通り。なお、1 *Hen. IV*. ii 4 205 は「ヘンリー四世 (タイトル) 第 1 部, 2 幕, 4 場, 205行」を示す。  
A (one and twenty) タイプ : *T. of Shrew* i 2 81, 1 *Hen. IV*. ii 4 205, 1 *Hen. VI*. iv 7 73, *Troi. and Cres.* i 2 171, *Troi. and Cres.* i 2 175, *Lear* ii 4 262, *Tempest* iii 2 16, *As Y. Like It* v 1 21, 2 *Hen. IV*. i 3 11, 2 *Hen. IV*. i 3 68, *Hen. V*. iv 8 111, 3 *Hen. VI*. ii 1 181, *T. Andron.* i 1 79, *R. and J.* i 5 39, *T. of Athens* ii 1 3, *Lear* ii 4 251, *Lear* ii 4 257, *Lear* ii 4 262, *Lear* ii 4 264, *R. and J.* iv 1 105, *All's Well* ii 1 168, *W. Tale* iv 3 44, 1 *Hen. IV*. iii 3 85, *W. Tale* iii 3 65, *T. Andron.* i 1 195, 1 *Hen. IV*. iv 3 56, *Lear* iii 7 16, *T. of Shrew* i 2 33, 1 *Hen. IV*. iii 3 54, *J. Caesar* v 1 53, *W.*

*Tale* iii 3 60, 1 *Hen. IV.* iii 3 212, 1 *Hen. IV.* iv 3 56, *Troi. and Cres.* i 2 256, 2 *Hen. VI.* iv 7 24.

B (twenty and one) タイプ: *Troi. and Cres.* Prol 5, 3 *Hen. VI.* iii 3 96.

C (twenty-one) タイプ: 2 *Hen. IV.* iii 2 224, *Lear* i 4 42, *J. Cæsar* iii 2 247, *Macbeth* iv 1 7, *Com. of Er.* v 1 400, *Coriolanus* ii 1 170\*, *Coriolanus* ii 1 170, 2 *Hen. IV.* ii 4 413, *W. Tale* v 1 126, *Hen. V.* i 2 61, *Hen. V.* iv 8 88, *W. Tale* i 2 155, *W. Tale* ii 3 198. \**Coriolanus* ii 1 170 には twenty-five, twenty-seven の 2 例があるため、この箇所を重複させておいた。

26 大塚高信『シェイクスピアの文法』1976年 研究社 76ページ。

27 それぞれのタイプの詳細は、以下の通り。

A (one and twenty) タイプ: S. 87, S. 197, S. 234, S. 307, S. 403, S. 578, S. 616, S. 692.

C (twenty-one) タイプ: S. 96, S. 124, S. 179, S. 182, S. 206, S. 289, S. 296, S. 296, S. 299, S. 364, S. 373, S. 398, S. 472, S. 523, S. 551, S. 554, S. 558, S. 558, S. 578, S. 695, S. 816, S. 816, S. 835, S. 835, S. 835, S. 1043, S. 1043, S. 1093, S. 1152, S. 1197.

28 森田貞雄『デンマーク語文法入門』1971年 大学書林 44～47ページ。

29 森 信嘉『ノルウェー語文法入門——ブークモール』1990年 大学書林 104ページ。

30 森田貞雄『アイスランド語文法』1981年 大学書林 73ページ。

31 日ソ学院教科書委員会(編)『実用ロシア語文法 基礎編』1979年 日ソ学院 170～171ページ。

32 中井和夫『ウクライナ語入門』1991年 大学書林 98～99ページ。

33 千野栄一／千野ズデンカ『チェコ語の入門』1978年 白水社 111ページ。

34 石井哲士朗『エクスプレス ポーランド語』1996年 白水社 59ページ。

35 寺島憲治『エクスプレス ブルガリア語』1990年 白水社 57ページ。

36 ガストン・ザンク『古仏語 11～13世紀』岡田真知夫訳 1994年 白水社 43ページ。

なお、スイスのフランス語、ベルギーのワロン語 (Wallonisch) では今日でもなお *septante* [70], *huitante* [80], *nonante* [90] という形を用いているという。

Vgl. Walter, Henriette: *Le français dans tous les sens*, Paris 1988, S. 195ff.

# Über das Zahlwort im Deutschen

## —hauptsächlich bei zusammengesetzten Zahlen wie *einundzwanzig*—

Hirokazu KUROSAWA

In der Zählung des Zahlworts weist jede Sprache Eigentümlichkeiten auf. Im Deutschen dürfte dies für die zusammengesetzten Zahlen ab *einundzwanzig* gelten. Ein Student stellte mir einmal die Frage : „Warum spricht man im Deutschen 21 als *einundzwanzig* (1 und 20), während man im Japanischen *nijūichi* und Englischen *twenty-one* ( $20 \cdot 1$ ) sagt?“

Auf diese Frage zu antworten ist einerseits eine wichtige Aufgabe für einen Deutschlehrer, denn mit solchen interessanten interlingualen Vergleichen kann der Student zum Erlernen der deutschen Sprache motiviert werden. Andererseits ist es für einen Forscher ein interessantes Thema, das speziell einem Deutsch als Fremdsprache Lernenden auffällt, weil selbst in den ausführlichen Grammatiken wenig Beschreibungen über das Zahlwort existieren. Bisher haben die meisten Forscher nur die morphologischen Probleme in den Mittelpunkt gerückt.

Zur Probe schlage ich zusammengesetzte Zahlen in einschlägigen Grammatiken und zweisprachigen Wörterbüchern der klassischen Sprachen, Altgriechisch und Latein, nach ; es ist erkennbar, daß es diese Zählung bereits in diesen Sprachen gibt.

Der vorliegende Aufsatz bezweckt, diese einfache Frage vom diachronischen und synchronischen Gesichtspunkt aus zu betrachten. Dabei thematisiere ich zwei folgende Punkte :

1. Seit wann ungefähr zählt man im Deutschen auf diese Weise?

## 2 . Warum benutzt man *und* zur Verbindung von Einer und Zehner?

Wir kommen zu folgendem Ergebnis :

In der althochdeutschen Zeit (ca.750~1050) übernimmt man Überreste aus den klassischen Sprachen. So gibt es damals einige Ausdrücke wie Subtraktion und Multiplikation. Im Verlauf der Zeit, spätestens am Ende der mittelhochdeutschen Zeit (d.h. bis zur Mitte des 14. Jh.), nimmt der Ausdruck *einundzwanzig* eine wesentliche Stelle ein. Mit anderen Worten : Von einigen anderen Varianten abgesehen, hält das Deutsche bis zur Gegenwart an dieser Ausdrucksweise fest.

In Bezug auf die Einschaltung von *und* ist folgender Grund anzugeben : Man benutzte *und*, um die zusammengesetzten Zahlen von der Multiplikation zu unterscheiden.

In Bezug auf das Englische benutzt man in der altenglischen Zeit (ca.700~1100) den „*one and twenty*“-Typ. In der mittelenglischen Zeit (ca.1100~1500) tritt der „*twenty and one*“-Typ auf. Und schließlich, am Ende dieser Zeit, der „*twenty-one*“-Typ. Seit dann benutzt man die drei Typen nebeneinander, erst am Ende des 18. Jh. setzt sich der „*twenty-one*“-Typ durch.

Eine weitere Untersuchung über das Zahlwort in den germanischen und slawischen Sprachen bringt uns zu folgendem Ergebnis :

Während die germanischen Sprachen größtenteils den „*einundzwanzig*“-Typ annehmen, nehmen die slawischen Sprachen den „*twenty-one*“-Typ an, wobei im Bulgarischen der „*twenty and one*“-Typ gebraucht wird. So sind in Bezug auf das Zahlwort die ersteren konservativer als die letzteren.

Das Deutsche hält also beharrlich an der traditionellen Zählung fest, während das Englische einen vereinfachenden und rationalisierenden (aengl. *ān ond twēntig* → engl. *twenty-one*), das Französische einen umschreibenden Weg (afrz. *setante* [70] , *uitante* [80] , *nonante*

[90] → frz. *soixante-dix* [60 (+) 10] , *quatre-vingts* [4 (×) 20] , *quatre-vingt-dix* [4 (×) 20 (+) 10] ) einschlägt. Übrigens hat man heute auch noch im Schweizerfranzösisch und im Wallonischen (Belgien) die Form *septante*, *huitante* und *nonante*.

Die deutsche Übernahme der Zählung ab *einundzwanzig* aus den klassischen Sprachen kann man somit für einen archaischen Zug des Deutschen halten.

Zieht man jedoch die anderen germanischen Sprachen und die slawischen Sprachen in Betracht, müßte man zusammenfassen :

Die Verbreitung der Zählung ab *einundzwanzig* kann man somit für einen archaischen Zug nicht nur des Deutschen, sondern auch der germanischen Sprachen halten.